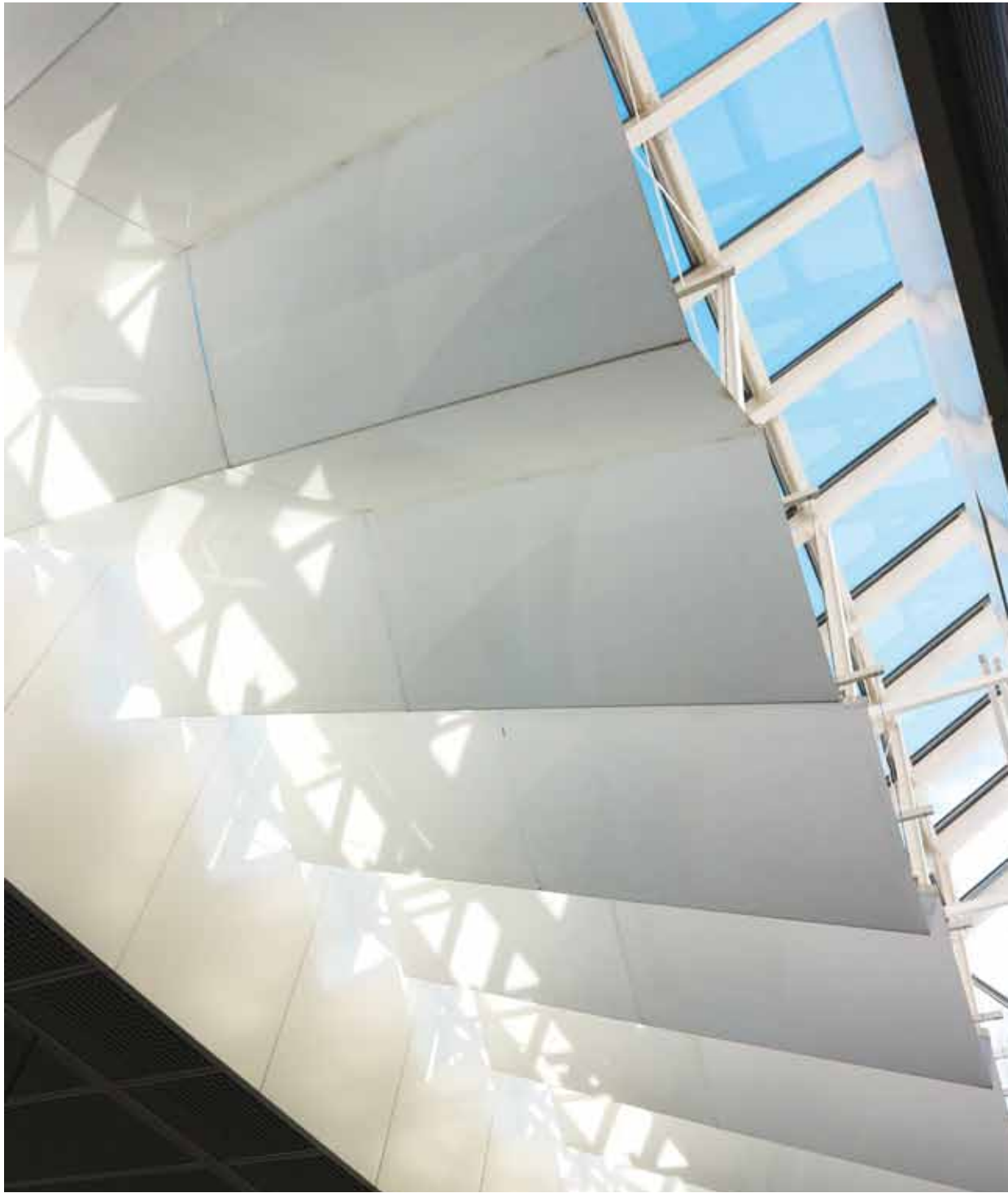


127

2019 WINTER

美術館NEWS



「美術館の紹介」Vol. 27

採光や照明は、美術館の
見え方を左右する大切な一要素。
展示室内は展示物にあわせこまやかな
調整をする一方で、展示室外の屋内広場では
トップライトからたくさんの光を取り入れ、
明るい空間を作り出している。

ミュシャと日本、日本とオルリク

ーグラフィックが紡ぐ、めぐるジャポニスム

石田 すみれ(学芸員)

2020年、日本とチェコの交流100周年を迎えるにあたり、特別展「ミュシャと日本、日本とオルリク」を開催し、チェコ出身のアルフォンス・ミュシャ (Alfons Mucha, 1860-1939) とエミール・オルリク (Emil Orlik, 1870-1932) の作品を通して、芸術分野における東西交流の軌跡を辿る。千葉、和歌山に続く、3会場目にあたる当館では、年明けの1月4日から幕開けとなる。

ミュシャは、没後80年を経た今も絶大な人気を博す画家である。ミュシャという名前を知らなくても、連続文様に囲まれ、渦巻く髪を漂わせる、どこか浮世離れした女性像を、一度は目にしたことがあるかもしれない。美しく優雅な作風に魅了された人も多いのではないだろうか。

チェコの東部、モラヴィア地方のイヴァンチツェに生まれたミュシャは、19世紀末、空前の日本ブームに湧くパリで、女優サラ・ベルナールの注文を受けた《ジスモンダ》(図1)にはじまる一連のポスターを制作し、人々を魅了した。柱絵や掛け軸を思わせる縦型の構図や、浮世絵版画に見られるようなはっきりとした輪郭線など、日本美術の影響をミュシャのポスターに見出すことができる。このようなポスターは間をおかず日本へと伝わった。そして、雑誌『明星』や洋画団体「白馬会」周辺の作家たちに絶大な影響をもたらし、藤島武二や中澤弘光らにより、星や花々を伴い、うっとりした表情を浮かべるミュシャ風の女性像(図2)が描かれた。

本展のもう一人のキーパーソン、エミール・オルリクは、ミュシャほどは知られていないものの、日本との交流において大変重要な存在といえる。オルリクはプラハに生まれ、ミュンヘンで学んだ版画家である。ウィーン分離派のメンバーとして活躍し、19世紀末のジャポニスムの潮流にふれ、日本への憧れを募らせた。そして1900年から翌年にかけて来日し、浮世絵版画の彫摺や日本画の筆法を学んだ。例えば、広重を思わせるような木版画(図3)を手がけている。彼の活動はそれだけにとどまらず、『明星』や白馬会の展覧会に作品を寄せ、日本の美術界と交流を持った。そして帰国後は、自身の作品や日本で収集した資料を発表し、ドイツ語圏の作家たちを木版画制作へと駆り立てた。

またオルリクが、新しい版表現を模索し、美術文芸誌『方寸』に集った作家たちに大きな刺激を与えたことも重要である。なかでも織田一磨(1882-1956)への影響が目される。『方寸』での活動とオルリクが滞日に制作した石版画にふれたことをきっかけに、織田は石版画家としての道を歩むことになった。本展では、彼の代表作とされる「東京風景」と「大阪風景」のふたつの連作が出品される。こちらも見逃せない作品群である。



図1



図2



図3



図4

さらに、岡山会場では、「^{ぞうしょひょう}蔵書票」という観点からチェコと岡山をつなぐ作品を紹介する。蔵書票は、本に貼り付けて所有者を示す小さな紙片のことを指す。日本では古くから蔵書印があるが、西洋では紋章などの図柄を用いた蔵書票が使用されてきた。量産するために版画技法を用いて作られることが多く、現在では本に貼らずに小さな版画作品として鑑賞することもある。この蔵書票の日本における普及に、大きな役割を果たしたのがオルリクである。彼が1900年、雑誌『明星』第7号に4点の蔵書票を寄せ、日本で初めて蔵書票が一般に広く伝えられた。

岡山は日本書票協会の創設者である志茂太郎(1900-1980)のふるさとであり、志茂が所有していた蔵書票およそ400点が残されている。現久米南町出身の志茂は、東京で酒店を営みつつ「アオイ書房」を設立し、版画家たちとともに数多くの限定本を手がけ、本づくりに情熱を注いだ。1943年には、各月のカレンダーに蔵書票を1枚ずつ貼った「書票カレンダー」を発行し、日本における蔵書票の普及に貢献した。なお「蔵書票」を意味する「書票」という言葉は、志茂と版画家の恩地孝一郎とが考え出した造語とされている。

1945年4月、生家に疎開した志茂は、以後久米南町に居をかまえ、戦争により一時中断していた「書票カレンダー」の発行や本の刊行を再開した。1957年には、海外の書票協会にならって日本書票協会を設立し、スペインやフランスなどヨーロッパ各地の愛好家とも交流を持った。現在、志茂の郷里に建つ久米南町図書館では、弓削郵便局気付の手紙とともに海外から送られてきた書票などおよそ400点が収蔵され、2010年より顕彰活動が行われている。そのコレクションのなかには、本展の出品作家のひとり、オタカル・シュターフル(Otakar Štáfl, 1884-1945)の手によるもの(図4)もみられる。今回、この蔵書票を含めてささやかではあるが、志茂太郎旧蔵品から厳選した関連ミニコーナー「書票—紙の宝石—志茂太郎旧蔵品から」を設ける。

盛りだくさんのエピソードで構成された本展では、大型のポスターから、手のひらサイズの蔵書票のような小さな作品まで、大きさの異なる様々な作品が並ぶ。思わず目を惹きつけられるポスターの存在感、本の装幀の美しさや蔵書票の細やかさを、ぜひ展示室で体感していただきたい。

【特別展】「日・チェコ交流100周年 ミュシャと日本、日本とオルリク」(会期:2020年1月4日～2月11日)

- 図1: アルフォンス・ミュシャ 《「ジスモンダ」ポスター》1895年 三浦コレクション、川崎市市民ミュージアム
- 図2: 中澤弘光 《嗅(女学生)〈美人と感覚〉》1905年 三重県立美術館
- 図3: エミール・オルリク 《富士山への巡礼》1901年 バトリック・シモン・コレクション、プラハ
- 図4: オタカル・シュターフル作の蔵書票 個人蔵

坂田一男の「虎の巻」

橋村 直樹(学芸員)

第一次大戦後の1920年代のパリは、世界各地から芸術家たちが集まり、独自の個性を花開かせた百花繚乱の時代であった。そんな狂騒の20年代のパリにあって、当時のアヴァンギャルドを咀嚼吸収してキュビズムからピュリスム、そして抽象絵画へと展開し、さらにピカソやレジェ、モンドリアンらとともに1925年の「今日の芸術」展に出品するなど第一線で活躍していた岡山出身の画家がいた。日本の抽象絵画の先駆者として知られる坂田一男(1889-1956)である。

医学者の父・坂田快太郎の長男として岡山市に生まれ育った坂田一男は、岡山中学校を卒業後、父と同じく医者を目指すも受験に失敗を重ねてノイローゼとなり、後年「地獄の時代」と回顧した20歳前後の苦しい数年間を過ごした。療養ののちに健康を取り戻してからは、かねてより望んでいた画家としての道を進むことを決意し、上京して川端画学校などで絵の勉強を続けることになる。さらなる研鑽の場を求めて1921年に32歳で渡仏し、パリのアカデミー・モデルヌでフォーヴィスムの画家オトン・フリエスに師事した。坂田はフリエスを敬愛していたものの、その芸術性には満足せず、より主知的な絵画を志向して、同じアカデミーで教室を持っていたレジェのもとで学ぶことを決意した。このレジェの教室には、北欧を中心に東欧、ロシア、アメリカなど世界各地から、最前線の絵画を求めた若き芸術家たちが集まっていた。そのように自由で先進的な考えを持つエトランゼが大半を占めた教室で、師のレジェから構想すること、すなわちコンポジションを徹底的に学び、さらにオザンファンやメッツアンジェら一線級の前衛画家たちと交流することで坂田は急速に成長していったのである。

足掛け13年にもおよぶフランス留学を経て帰国してからは、貪欲に展覧会への出品を重ねていたパリ時代とは打って変わって、戦後になるまで展覧会への出品をほとんど行わず、岡山県の玉島に構えた自宅兼アトリエで1956年に亡くなるまで自己の絵画の造形的探究に没頭した。中央画壇やアカデミズムといった権威との交わりを断固として拒んだ坂田であったが、玉島の画家たちとともに美術団体を結成したり、1949年には「A.G.O.(アヴァンギャルド岡山)」を主宰して有望な若手作家たちを指導したりするなど、岡山県下では地元の画家たちと交流し、後進の育成にも大いに励んだのであった。

坂田は生前岡山県外ではほとんど知られる機会がなく評価されることもなかったが、残された作品を見てみると、どれも主知的で、線や色、構図など絵画の造形的要素が突き詰めて考え抜かれていることがわかる。ただ坂田の作品には、頭の中だけで構想するというよりは、手を動かして繰り返し描画し、さらにそれをこすったり消したりして形を造り出していくというような、ある種の泥臭さも感じられる。事実、坂田は煙草の包装紙やレシートなど身近にあった紙を裏紙として再利用してスケッチし、いつでも絵の構想を練っていたことが知られている。頭の中



図1: 坂田一男の「虎の巻」

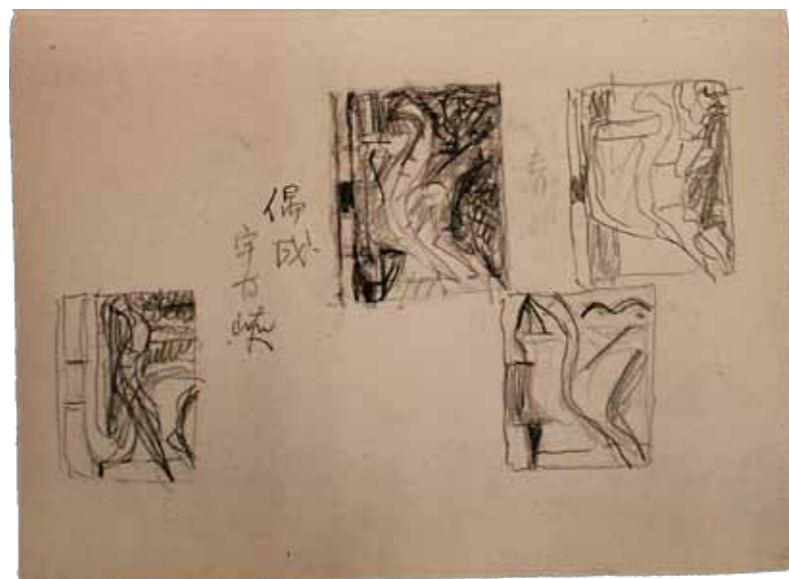


図2: 「虎の巻」より「偶成 宇甘峽」



図3



図4



図5

図3: 坂田一男《象岩の造型》1950年 鉛筆・紙
図4: 坂田一男《象岩》1950年 油彩・カンヴァス
図5: 坂田一男《六口島象岩》1951年 油彩・カンヴァス

での構想をもとに手を動かして描いたり消したりすることによって新しい形が生まれ、そうした偶然生まれた形をさらに展開して最終的なコンポジションが残されたのであろう。

そのように頭の中での構想を坂田が手を動かして発展させて造形したことを窺わせる資料が岡山県立美術館の寄託品の中にある。おそらく生前には他の誰も見ることができなかったであろう坂田一男の「虎の巻」がそれだ(図1)。厚紙を表紙にした簡易冊子状の綴じもので、表紙には「禁他見／画稿用キミツ書類／虎の巻 サカタ」とある。この虎の巻のフォルダに、エスキースともいえない構想の形を自由に描いたスケッチ類が何枚も収められているのだが、その中の一枚に「偶成 宇甘峽」と記されたラフスケッチがある(図2)。この宇甘峽とは、岡山県中央部にある赤橋と紅葉で有名な景勝地・宇甘溪のことで、坂田は1951年に岡山県観光物産課から、観光展への出品のため宇甘溪の絵を描くことを依頼されたのだ。その時の話を年下の友人の画家・藤彦衛に次のように伝えている。

又しても観光展ナドと言ってウルサイ宇甘峽^{マツ}をカケというのでハルバル出かける程余技的ノキサもナシ。画室で一寸アブストラクトヘソの緒切って未だ一度も見た事もウワサも何も材料ナシ只カケと言はれた事。ソレがモチフで偶成と画題付けるモノヤツツケました。(1951年3月18日付藤彦衛宛書簡)*

坂田は、生まれてこの方見たことも聞いたこともない宇甘溪を何の材料もなしに描けと言われたから偶成と画題を付けてアブストラクトで描いてやったと伝えている。さきの「偶成 宇甘峽」と記された一連のラフスケッチは、この観光展のための油彩画を描くにあたっての事前の構想として描かれたのであろう。坂田自身は「ヤツツケました」と茶化しているが、何度も繰り返し描いて構図を考えていて、峡谷を流れる川の景色をいかに抽象化するか思案した跡が窺われる。なお、「又しても観光展ナドと言ってウルサイ」とあるのは、前年の1950年にも観光展のために依頼を受けて作品を制作したことを指している。前年の観光展で坂田が描いたモチーフは、瀬戸内海に浮かぶ六口島の象岩であり、その際の素描(図3)と本作の油彩画(図4)、さらに抽象化した油彩画(図5)は今も残されている。おそらくこの「偶成 宇甘峽」も観光展のための油彩画の最初のラフスケッチであり、本作の油彩画もどこかに残されているのかもしれないが、残念ながら今日までその存在は知られていない。

一つのモチーフを何度も繰り返して素描を行なってコンポジションの核心に迫った坂田一男。その渾身の作品群を、同時代の国内外の他作家の作品と比較しつつ読み解く展覧会「坂田一男 捲土重来」が今月7日より東京ステーションギャラリーで始まった(2020年1月26日まで)。同展は東京会場の後、当館でも2020年2月18日から3月22日まで開催される。抽象絵画を真摯に突き詰めた求道者・坂田一男の作品世界の全貌を解き放つ展覧会にぜひご期待いただきたい。

* 妹尾克己「坂田一男から藤彦衛宛書簡について」『SAKATA オマージュ・坂田一男』第8号、2019年、30頁

新収蔵品紹介

File 14

松井えり菜
《あなただけDreaming!》

古川 文子(学芸員)



松井えり菜《あなただけDreaming!》2018年 油彩・キャンバス 本館蔵

岡山県立美術館では毎年、岡山県新進美術家育成「I氏賞」受賞者の作品購入を進めている。今春には、第3回(2009年度)大賞受賞者である松井えり菜の《あなただけDreaming!》が新たに本館の収蔵品に加わり、「岡山の美術」第2期(2019年6月26日-7月28日)で、加藤竜《コロッセオ》、高松明日香《海からの風》、有永浩太《netz》など、近年収蔵となった他の受賞者の作品6点とともに、多くの来場者にご覧いただいた。

岡山県倉敷市出身の松井えり菜(1984-)は、学生時代から一貫して、自画像の可能性を追求し続けている。客観的観察と確かな描写力に基づいた油彩表現を軸に、自らの分身のごとく愛してやまないウーパルーパー(幼形成熟のメキシコサンショウウオの通称)をはじめ、お気に入りのキャラクターやおもちゃ等、主観的な感覚により選び出したモチーフで画面を満たし、独自の世界観を示す。その表現手法は絵画のみに留まらず、自画像やウーパルーパーの立体造形、岡山ゆかりの「桃太郎」の物語を描いた紙芝居の映像作品化など、多方面に拡がりを見せている。

本作も、大胆なクローズアップによる巨大な自画像が画面中央を占める。ホクロやうぶ毛まで克明に捉えた迫真の描写に、誰もが目を奪われる。背景には、月や木星を配した紺青の宇宙が広がり、壮大なスケールで作者の夢が展開する。そこで自画像に負けない存在感を示しているのが、右下で丸く大きな瞳を輝かせる「Matthew(マシュー)」。その頬の横に幸せそうに並ぶ、作者の弟夫婦の愛猫である。夢に見るほどのMatthewへの片思いが本作の主題であり、丸みを帯びた愛らしい姿は、さまざまなポーズや表情で繰り返し画面の中に登場する。親愛なる存在への思いを込めて描き上げた本作は、作者自身の希望もあり、故郷・岡山の本館に収蔵となった。

さて、今年度で第13回となる「I氏賞」の最終選考のための作品展が、年明け1月29日から岡山シティミュージアム(岡山市北区駅元町)で開催される。これまでの受賞者の活躍に続く、新進気鋭の美術作家の登場に期待したい。

展覧会スケジュール

12月
December

11月8日|金|—12月15日|日|

【岡山の美術展】
I氏賞受賞作家展 炭田紗季・兼行誠吾

【岡山の美術展】
衣笠豪谷

【岡山の美術展】
もっと伝統工芸 中国少数民族の衣装

展覧会やワークショップなどの最新情報は
公式ホームページにて随時公開中
<https://okayama-kenbi.info>

1月
January

1月4日|土|—2月11日|火・祝|

【特別展】
日・チェコ交流100周年
ミュシャと日本、日本とオルリク

19世紀末のヨーロッパでは、ジャポニズムと呼ばれる日本文化への熱狂が起きました。チェコ出身のアルフォンス・ミュシャや、エミール・オルリクも日本美術の影響を受けた作家たちです。その一方で1900年頃の日本では、藤島武二らがヨーロッパからの影響を受け、ジャポニズムの還流とも捉えられる現象がみられました。本展では主にグラフィックを中心に展開した東西交流を紹介します。

1月13日|月・祝| 14:00~15:30

記念講演会 「アール・ヌーヴォーの花園
アルフォンス・ミュシャ(仮題)」

講師 西川奈津美氏(堺 アルフォンス・ミュシャ館 学芸員)
会場 2階ホール(先着210名) ※無料

1月25日|土| 14:00~15:30

美術館講座 「ミュシャと日本、日本とオルリク
—響きあう東西交流—」

講師 石田すみれ(学芸員)
会場 地下1階講義室(先着70名) ※無料

2月
February

1月26日|日|

WS 「チェコビーズの小物づくり」
会場 地下1階研修室 ※要申込

2月18日|火|—3月22日|日|

【特別展】
坂田一男 けん どころい 捲土重来

20世紀初頭のフランスで起こったキュビズムから抽象絵画への展開を、日本人として先駆けて最も深く理解し、その画業を通じて追求しつづけた坂田一男(1889-1956)。本展では、1920年代のパリ留学を経て、帰国後は中央画壇から距離を置きながら郷里岡山で制作しつづけた坂田の世界レベルの良質な作品を、キュビズムから抽象絵画への流れを踏まえながら同時代の海外作家の作品とも比較しつつ紹介します。造形作家・批評家の岡崎乾二郎氏による監修にも注目です。

期日未定 14:00~15:30

記念講演会
講師 岡崎乾二郎(本展監修者、造形作家・批評家)
会場 2階ホール(先着210名) ※無料

3月
March

ラグビーワールドカップから

守安 収

ラグビーワールドカップが終わりました。私の大学でのラグビー生活は、水を飲まず、うさぎ跳びでグラウンド周回、仲間を肩車して階段上りとか、非合理、不条理に明け暮れた練習を経て試合に向かうというものでした。でも後悔はなく、今も観戦を楽しんでいます。▼大会を契機に「ワンチーム」「ノーサイド」といった用語がかなり定着し、さらに主将のリーチマイケル氏が度々語った「ダイバーシティ」、すなわち人種・国籍・性・年齢は問わずに人材を活用する多様化(多様性)という言葉も耳になじんできたようです。▼こうした言葉のもつ意味を、私どもの館も尊重すべきでしょう。各館を巡回する展覧会は担当学芸員の持ち味によって色付けされ、各館の展示は決して同じようには仕上がりにません。つまり巡回展は共同歩調をとる一方で競合が行われ、どこでみるかで印象が異なります。自主展の場合は担当者の意向が優先されるとはいえ、専門分野が別の学芸員、ポジションが違う人間との意見交換によって新たな切り口がみつかることがあります。コミュニケーションが活発化して組織がまとまり、そして充実した展示が構成されることで多様性に富む来館者の記憶に残れば嬉しいですね。▼11月4日(月・振休)に終了した特別展「熊谷守一」は巡回展でしたが、幾つか当館独自で作品を追加しました。2階の「岡山の美術」展示室はすべて「太田三郎」作品で埋め尽くしました。これら2つの展覧会を同時進行させた試みはいかがだったでしょうか。開催する展覧会の選択とそれをどのように提示するかで、館の存在価値が問われる時代です。ラグビー同様、にわか美術ファン大歓迎ですし、ご覧になられた方々の評価を大切にしたいと思います。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

三井麻央

今号は2020年のはじまりを飾る2つの展覧会を中心にご紹介しました。実はこの時期、県美では岡山県下の先生方と協力したはじめての教育普及展「みんなの参観日 図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」もおこなわれます。岡山県の小中学生は図工や美術の時間、どんなことを考え、学んでいるのでしょうか？もうずいぶん前に卒業したという大人の方にも、新鮮な気持ちでご覧いただけるはずです。会期は前期が2020年1月12日(日)～19日(日)、後期が2020年2月23日(日)～3月1日(日)まで。こちらもぜひお楽しみに。